第４０回区民車座集会意見交換内容（宮前区）

１　開催日時　平成３０年１１月１８日（日）　午後２時００分から午後４時１０分まで
２　場　　所　セレサモス宮前　モスぴーホール
３　参加者等　参加者２０名、傍聴者約２０名　　合計４０名

＜開会＞
司会：それでは皆様、お待たせいたしました。定刻となりましたので、ただ今から第４０回区民車座集会を始めさせていただきます。
　私は、本日の司会を務めさせていただきます、宮前区役所企画課の古泉と申します。よろしくお願いいたします。
　本日の車座集会は、「子どもや若い世代が住み続けたい″ふるさと宮前区″を創る」ということをテーマに開催いたします。子どもや若い世代と地域をつなぐアイデアについて、また、そのアイデアを地域の中に広げていく方策について皆さんと語り合い、今後も、一緒に暮らしやすい宮前区を創る仲間の輪を広げる場になればと思います。
　それでは、行政からの出席者を紹介いたします。
　福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：小田嶋満宮前区長でございます。

区長：どうもありがとうございます。どうぞよろしくお願いします。

司会：それでは、福田市長から一言、御挨拶を申し上げます。市長、お願いいたします。

＜市長挨拶＞
市長：改めましてこんにちは。今日は区民車座集会に御参加をいただき、誠にありがとうございます。この距離なので、本当はマイクは要らないんですけど、インターネット中継の都合があってお許しをいただきたいと思います。
　先ほど、司会の古泉さんからお話あったように、昨年度も車座集会、実は富士見台小学校でやらせていただいて、あのときのテーマが、「家庭人・仕事人・地域人として考えるみやまえの未来」というような形で、どうやって宮前区の魅力を私たち住民同士が知るかということでお話しさせていただいて、そのときに、いろんなアイデアが出たんですけども、一つのキーワードが、「ウェルカム感」って欲しいよね、川崎、特に宮前区は新しい方たちが、どんどんどんどん入ってくるという土地柄なので、こちらに新しい住民として引っ越してきて、何かちょっと、子育てに不安があるとか、あるいは、なかなか地域とつながらないなとかいうようなところだと、少なくとも自分たちのふるさとになっていかないということで、もっともっと、何か「ウェルカム感」が欲しいという言葉が出てきて、「ウェルカム感」って初めて聞いた言葉だなと私は思ったんですけど、でも、すごく大事な言葉で、誰にとっても、この宮前区が、ああ、いいところに引っ越してきたなとか、ずっと住んでいる人にとっては、住み続けたいなと思えるような、そんなまちをみんなの力でどうやってつくっていけるかということを、これからも考え続けて行動し続けなくちゃいけないというふうに思っています。

今日は、事例発表として、４団体の皆様から御紹介をいただいて、今日は、参加者の皆様８名の方に、４０代までというものすごくセグメントされている方々に、公募させていただいて、参加をしていただいたということです。それぞれ、地域にどういう形で、今、関わっていただいているのか、後ほどコメントいただきながらお話しいただきたいと思いますけれども、是非、こういった場で、輪がどんどん広がっていくと、自分もやってみようかなと、こういうところだと参加できるかも、あるいは、もっといいアイデアを私は持っているよという人が、どんどんつながっていくと、そういうきっかけの、今回、車座集会になれば、大変ありがたいなというふうに思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：ありがとうございました。
それでは、本日の進め方について御案内いたします。お配りしております次第を御覧ください。本日は、テーマに即して事例発表者の皆様をお呼びしております。また、事例を聞いての意見や感想をお伺いするために、一般公募で４０代までの若い世代の皆様に、参加者としてお集まりいただいております。それぞれの事例発表ごとに、参加者の皆様に、御感想や御意見をお聞きしながら進め、最後に、全体を通した意見交換を行いたいと思います。
初めに、事例発表の皆さんを順に御紹介いたします。
宮前区まち倶楽部代表、辻麻里子さんです。

辻さん：よろしくお願いいたします。

（拍手）

司会：鷺沼駅前や公園でまちかどマルシェを主催し、まちに賑わいとつながりを作り出している活動について、マルシェに参加しているサンフェスタの小川さん、花の台町内会副会長の小口さんを交えてお話しいただきます。

（拍手）

次に、有馬・野川生涯学習支援施設アリーノの館長、山口定男さんです。

山口さん：山口です。よろしくお願いします。

（拍手）

司会：ボランティアや事業者など様々なつながりが広がっているアリーノこども食堂の取組について、利用者でもあり、調理ボランティアとしても活動している関さんを交えてお話しいただきます。

（拍手）

次に、じもたんｋｉｄｓ代表、中田真由美さんです。

中田さん：お願いします。

（拍手）

司会：小中学生が記者になり、地域の大人たちを取材することを通して、地域の子どもも大人も少しずつつながりが広がっていく活動について、子ども記者の秦野さん、小田嶋さん、取材を受けた料理家の曽我さんを交えてお話しいただきます。

（拍手）

最後に、ＮＰＯ法人ファンズアスリートクラブの理事長、井上秀憲さんです。

井上さん：お願いします。

（拍手）

司会：宮前区には、体育大学の学生や若いアスリートが実はたくさん住んでいます。そうした学生アスリートの皆さんが地域と関わることで、まちを元気にする活動について、大学生の天野さん、神木本町自治会長の小川さんを交えてお話しいただきます。

（拍手）

また、事例発表の後に、本日は宮前区からも、地域の課題に対して、地域の人たちや事業者と区役所が一緒に一歩ずつ取り組み始めた市営高山団地の住民主体の出張販売会の取組についても御紹介したいと思います。

先ほど、市長からの御挨拶にもありましたように、本日のテーマを考えるときに、昨年度の車座集会で参加者の方が発言された、「ウェルカム感」というのが、ひとつのキーワードになるかと思っております。昨年度実施した市民アンケートの中では、地域活動に関心がある人は宮前区で３１％となっているのですが、実際に継続して活動している人は１３．１％と開きがあります。地域活動に参加しない、しづらい理由としては、同じく昨年度、区で行った「宮前区民の暮らしを豊かにするためのアンケート」での６４歳以下の世代の回答を見ると、「時間的に余裕がない」というのが５２％で一番多いのですが、それに次いで、「参加するきっかけが得にくい」と答えた方が３８％と多くなっております。また、そもそも「身近に参加したいと思う活動や団体がない」という回答や、「活動内容に関する情報が発信されていない」という情報発信の課題を挙げる方もそれぞれ３割近くいるという結果が出ています。

若い世代や、働き盛りの人たちも地域の活動に参加したくなるように、そして宮前区に移り住んできた人や、子どもにも大人にも開かれたまちの雰囲気をどのように作っていくか、本日の事例発表や意見交換の中で皆様と考えていくことができればと思っております。

それでは、大変お待たせしました。さっそく事例発表と意見交換に移りたいと思います。ここからは、市長に進行をバトンタッチさせていただきます。

市長、よろしくお願いいたします。

＜事例発表＞

市長：それでは、辻さんのほうからでよろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。

辻さん：皆さんこんにちは。宮前まち倶楽部の辻麻里子と申します。本日は、よろしくお願いいたします。

宮前まち倶楽部は、２０１２年から活動を始めて、ベッドタウンをホームタウンにしたいと思って活動を始めました。まちの中に、みんなで自分たちの居場所や、出番を作ろうという思いで活動を始めました。最初は、いろんな方と出会うために、いろんなところに行って、本日お出でになっている多くの方とも出会うことができました。いろんなところに行って、どうやって人をつなげばいいだろうということも考えました。そして、一昨年から考えたのが、私たちが発掘するよりも、みんなでどこかに集まってまちの中に姿を現してしまったら、何かそこで起こるんじゃないかという考えで、街角でマルシェをやってしまおうということを考えました。そして、この図でも、これが公園でやったまちかどマルシェの写真ですが、あちらにあります、普通は割と使われていない寂しい公園が、マルシェをやることでこんなにたくさんのいろんな方々も参加される、そういう場を作ることができました。

なぜ、こんなことを思ったかというと、まちの中には、実はすごくたくさん、いろんなことをやっている方がいて、実は面白いことがたくさんある。けれども、一般の方はそれを見ることができないし、どう参加していいかわからない。先ほどもおっしゃった情報発信の問題もあると考えました。

そこで、見えるために、みんなの活動が見えるために、そしてまた、参加したい方が気軽に参加できるように、まちの中にマルシェという方法を考えました。でも、マルシェといっても、一般的に皆さんが思い描くのは、物を販売するマーケットかと思います。それも確かに含まれていますが、私たちが考えるマルシェには、ハンドクラフトの物を作っていらっしゃる方や、似顔絵を描いていらっしゃる方、そういう販売をされる方もいらっしゃいますが、まちの中で、いろんな市民活動をやっている方も加わっていただいて、まちの中で、私たちはこんな活動をしていますという紹介の場所、また、区役所で、いろいろ作っているさまざまなパンフレットやチラシ、マップなど、余り市民の方に届いていないものも一緒に置いて、まちの案内などもしています。

そして、まちの中に、誰かに何かに偶然出会う、そういう自分が公園を通りかかったら、駅前を通りかかったら、何かに偶然出会う、そういうきっかけをつくって、その中で何かつながりが生まれるのではないかと思ってやり始めました。

すると、本当に様々なつながりが生まれました。これは鷺沼駅前の東急電鉄から場所をお借りして、東急住まいと暮らしのコンシェルジュの店舗前デッキと、２階のセミナールームを無料でお借りしてやっております。年に４回開催しています。野菜を販売してくださる農家の方々も御参加いただいています。宮前区に農家があったなんて知らなかったという方も、たくさんおられました。

鷺沼には、さぎ沼商店会の「さぎぴょん」という、ゆるキャラもいます。それも知らない方もたくさんいて、子どもたちに大人気でした。その隣のおばあちゃまは、実は孫にクリスマスプレゼントをずっと買いたかったんだけれども、おしゃれなところに行けないけれども、ここだったらゆっくり買えるわといって、去年、大量にクリスマスプレゼントを買っていただきました。また、いろんなワークショップもやって、その中で市民の方がいろんな方と話して、また、次の、自分もやってみたいとか、そういうものにもつながるようになっています。

公園では、また違う活動も含まれています。まち案内というふうに設けまして、先ほど言ったように、区役所で、一番下のあそこですけれども、区役所でいろいろ作っていらっしゃるものや、私たちが、まちの中で暮らして、ここが飛びっきりいいよというようなものを、まちの中に新しく来られた方とかに紹介する、そういうまち案内コーナーも設けています。

また、小さなお子さん連れのお母さんがたくさんいらっしゃるので、本の読み聞かせや、絵本をたくさん並べて、自由に読んでもらう活動もしています。そうすると、まちかどマルシェは、この１０月に３回目をやったのですが、自発的に自分の子どもだけではなくて、他のお子さんも集めて本を読んでくださるお母さんが現れました。それから、孫のために絵本を買ったんだけど、孫がもらってくれないからといって、わざ

わざ自宅から絵本を寄附してくださったおばあちゃまもいらっしゃいました。そういうふうに、まちの中に何かがこう、生まれてくる、そういうきっかけづくりを、誰もが参加できる、何も一々申し込まなくてもいい、ただ立ち寄ればそこで何かがやっている、そういうことを目指して、まとかどマルシェをやっています。

そして、最初のスライドで、まちかどマルシェには、「まちかど×マルシェ」というふうに書きました。私たちは、まちかどマルシェという固有名詞でやっていますけれども、まちの中にはたくさんいろんなマルシェをやっている方がいらっしゃいます。そういう方たちともつながって、いろんな街角でいろんな出会いの場がつくられるといいなというふうに願ってやっています。

それで、今日は、一緒にまちかどマルシェに御参加いただき、また、野川地区でマルシェを御自身でやっていらっしゃる小川さん、それから、この公園の管理運営協議会をやっていらっしゃる、花の台町内会の小口さんにも、一緒に来ていただきました。ちょうど多様な年齢層というのも、外でやるときには、こういう多様な年齢層もかかわれるというのも、一つの大きなポイントではないかと思います。

では、小川さん、まず、お願いいたします。

小川さん：こんにちは。私は、宮前区に住んで年齢分、四十うん歳、住んでおります。一度狛江市のほうに、ちょっとだけ、１年いなかったぐらい狛江市のほうで子育てしたんですけれども、また宮前区に戻って、子育てしない状態から、狛江市にいて子育てをしている状態で戻ってきたときに、それこそ、さっき市長さんがお話しくださった「ウェルカム感」というのを全く感じなかったんですね、宮前区で。狛江市が実は、すごく、小さい市なんですけど、みんなまち全体が一体感があって、すごいいい場所で、戻ってきたときに同じような感じで、みんな子育ても応援してくれるんだろうなと思ってばっと入ったら、何か、あれ、みたいな。自分ひとりで子育てしているというイメージがあって、悲しい思いをしながら子育てをしているときに、イベントとかをやれば、みんな一緒に子育てができて、寂しい思いもしないで、またどんどんつながって、子育てしながらいろんなことができるかなと思って、サンフェスタというイベントを２０１５年１０月に初めて開催しました。そのときは、６ブースで公文の小さいお部屋を借りて始めたんですけれども、どんどん大きくなって、どんどんみんなつながって、前回は、６月に野川にある宮山スポーツプラザというところで、３４ブース、ほとんどママたちなんですけれども、手づくり品だったりとか、あと、マッサージだったりとか、占いだったりとか、フードのブースもあるんですけれど、３４ブース出して、サンフェスタ、それだけ大きくなることができました。

結局、そこでみんなつながって、いろんな場所でまたイベントを開催したりとか、あとは、イベント以外でも、こういうのあるから行かないって誘い合いながら、みんながどんどんつながって、もともとつながりを目的でやったイベントなんですけれども、やっぱり子育てするのってすごく大変で、ママたちの笑顔がないと子どもたちも笑顔にならないなというものがあったので、サンフェスタというのは、太陽のフェスタ、ママの笑顔というのを太陽に見立ててサンフェスタというのを名づけたんですけれども、ママが笑顔になって子育ても楽しくやろうよというのが、ちょっとずつそのサンフェスタによってできていっているのかなと思いながら、次回はまたどこでやろうかなとか、何ブース出そうかなというのを考えながら、今、進んでおります。

今日は、細かい話はしないで、市長さんに一つだけお願いしようと思って来たことがあったので、よろしいですか。

サンフェスタとかイベントをやるときに、やっぱり集客するのがすごく大変なんですけれども、今はＳＮＳとかで結構、集客、フェイスブックとか、ブログとかでもしているんですけれども、やっぱり、自分が思って主催してやっていることの声を届けるのって、なかなか大変で。私は、普段は、病院だったりとか、耳鼻科、小児科が多いんですけれども、こちらにチラシを張らせてもらったりとか、あとは公園に直接行って、ママたちに直接声をかけて、こういうのをやりますと言って渡しているんですけれども、ぜひ、市役所や区

役所などに、チラシを張らせてください。絶対にだめと言われたんですね。金額を入れないと、やっぱり、ママたちも何をやっているかというのが分からないので、金額を入れているチラシを作っているんですけども、金額が入っているチラシは絶対にだめと言われちゃいますし、イベント自体のチラシも貼らせてもらえないので、区役所とか、あとは、支援センターとか、こども文化センターとかで貼らせてもらえると、もう、そのままママたちに伝えることができるので、これはもうずっと、３年間言い続けているんですが、全然貼らせてもらえないので、是非、お願いいたします。

以上です。ありがとうございました。

（拍手）

小口さん：花の台町内会から来ました小口と申します。今の辻さんとは、近くに住んでいるということと、町内会の掲示板にビラを貼らせてくださいとか、そういうことを依頼されたり、いろいろしまして、お付き合いさせていただいていますけど、先ほどの小川さんがおっしゃったように、うちにもビラを貼ってくださいと言いましたら、それはちょっと、多少、お金の問題があるから、それはだめだという意見もありましたけど、やっぱり、そんな大々的にやるわけじゃないから、それは事情があっていろいろやっているんだから、それはそれでいいんじゃないかということになりまして、最近は、ビラを貼るようにしております。

それと、やっぱり、この公園を使って、いろんなことをやっていらっしゃいますけど、町内会のほうではお掃除をする公園が１２カ所ありまして、１年に３回、皆さん近所の人、集まっていただいて、やっているんですけど、そんなことで公園のことをわりかし気になる、あそこは僕の担当だというような感じで気になっていると、いろんなことを考えちゃうんですけど、公園って、やっぱりいろんな利用の仕方がたくさんあるんだけど、時代とともに使い方が、徐々に変わっているんじゃないかなと思います。例えば、この間は、公園のところを通りかかりましたら、どこかのお兄さんが、バイオリンの練習をしていました。そうしたら、子どもたちは、わあっと行って黙ってじっと静かに聞いているんですね。あれはすばらしいなというふうに思いました。　あと、何ですか、昼は、何か老人の夫婦が、お弁当なんかをこう、二人でどこか買ってきた弁当を食べているんでしたけど、そういう場面もありました。いろんなことがありますので、どうしても汚す人もいますけど、やっぱり、我々できれいにしなきゃいけないなというふうには思いますけど、何か一つ、いろんなことがありますけど、一つ気になる。

最後に気になることが一つございまして、それは、公園に行くと、宮崎第一公園もそうですけど、何か、大分、禁止と書いてあるんですね、何とかしちゃいけませんというのが、すごく大きく禁止、禁止とべたべた貼ってあるんです。その宮崎第二公園もそうです。だから、禁止ということは、みんなくつろぎに来ているわけだから、ちょっと、あれは別の言葉に置きかえていただければというように思います。

ちょっと長くなって失礼しました。よろしくお願いします。

（拍手）

市長：どうも、発表ありがとうございました。

小口さん：すみません。

市長：いやいや、辻さんの発表、とても興味深く聞かせていただきました。ベッドタウンからホームタウンにしようということで、今の小口さんの話にもつながるかもしれませんけども、意外と公園って、こういう使い方はだめだと思い込んでいるという節がありますよね。意外とこういう使い方ができるんだという、で

も、何となく、今、小口さんおっしゃったように、あれしちゃだめ、これしちゃだめというふうに書いてあるから、とにかく公園は、何か使っちゃだめなのかなと勘違いしてしまうほど禁止事項が多いので、なんですけども、こういうマルシェも、実はできるというふうなことですし、駅前の、これ多分、辻さんなんかはすごい努力して、東急さんなんかと交渉されたんだと思うんですけども、ああいう駅前で、えっ、こんなところでやっちゃって大丈夫と一般の方が思うぐらい、実は、東急さんの土地ですから、御理解していただければできるとかというですね、何となく思い込んでいる節というのを取っ払われたところが、すごく効果が大きいだろうなと思わせていただきました。

特に、いろんな場所で、宮崎台の公園でやったり、鷺沼の駅でやったりとかという、いろんなところでやられると、なかなか同じ宮前区内に住んでいても、私も宮前区在住ですが、そのエリアから余り出ないですよね。鷺沼駅を余り利用していなければ、宮崎台の駅を利用している人だと、わざわざ鷺沼まで行かないということもありますから、そういう意味で、いろんなところでこういう窓が開かれているという取り組みをされているところに、すごくすばらしいなと思いました。

さあ、ちょっと御意見、さっき小川さんがコメントされているときに話しかけていましたけど、お仲間ですか。佐藤さんも、お友達ですか。

佐藤さん：はい。

市長：どういうふうにつながっておられるんですかね。

小川さん：佐藤さんは、出店者さんです。

市長：出店者さん。先ほどの３４ブースの中の。

小川さん：似顔絵を描かれている。

市長：ちょっと佐藤さん、どういうきっかけで知り合ったのか･･･。

佐藤さん：区民会議というのが、今年の３月まであって、それで、部会が二つあって、僕がやっていたほうが、宮前活性部会といって、そこで、僕がイラストレーターで似顔絵をやっていたので、何か区内にこれだけ人口がいるんで、もっと、僕みたいな絵を描ける人とか、例えば、何か物が作れる人とか、技術とかを持った人って、絶対埋もれてというか、いるんだろうけど知らないんだろうなと思っていて、そういう、いわゆるクリエーターさんみたいな人を試しに区民会議の中で募集してみたんですね。そうしたら、やっぱり結構、わんさか集まってくださって、そう限ったわけではないですけど、傾向としてやっぱり子育て世代のママさんで、アクセサリーがつくれるとか、フェルト、羊毛だとかで何か小物がつくれるとか、そういう方がすごいいて、やっぱり、レベル高いんですよね、もうすごい。もう、全然、製品として世に出せるクオリティーで。でもやっぱり、イベントとかもちろん出されて自分で発表できるように努力はしているんですけど、やっぱり、なかなかそういう場所が見つからないという声はいろいろ聞いたので、僕としても、何か、同じものづくり人としては、もっとこう、例えばイベントと作家さんと、そういう発表できる場所をつなぎたいなというので、人を募集した中で小川さんが来てくださって、すごく共鳴したので、それ以来、一緒にやらせていただいているという形です。

市長：何か、先ほどの辻さんの話と、小川さんの話も、いろんなところでフェスタをやっている同士がまた

つながってくるというふうなのも、すてきな話ですね。

辻さん：そうですね。佐藤さんは、まちかどマルシェにも出てくださって、小川さんも、サンフェスタとしてまちかどマルシェにも出てくださっていて、この間、マルシェをやっている人たちみんなで集まって、情報交換会もやりました。

市長：ちなみに、区内でマルシェをやっている人って、主催団体みたいなのは幾つぐらいあるものなんですか。

佐藤さん：あのとき出たのは、７団体かな。

辻さん：７団体、大きいので７団体ですね。きっと、もっと小さいところでもやっていらっしゃるかもしれないですけども、案外、区内全域で、いろんなところでやっている方がいらっしゃいます。

佐藤さん：はじめ、稗原のほう入れて四つでやろうと思ったら、そこからロコミで増えて７団体になって。

辻さん：それぞれやっていらっしゃるところも、農園の中でやっていらっしゃる方とか、御自宅の家を開放してやっていらっしゃる方とか、場所を借りてやっている方とか。

市長：そういう意味では、頻度はみんなばらばらなんだけども、フェスタはやっているよというふうな方たちが７団体、区内にいると。把握しているだけで。

辻さん：はい。

市長：なるほど。
　ちなみに、佐藤さんのその似顔絵は、いろんなところ、地域のところで、活動団体とかにつながっているんですか。

佐藤さん：そうですね。最初、小川さんとか、辻さんとかとつながる前は、鷺沼で年に１回、秋祭りとさくら祭り、あそこは一応、会の方と知り合いなんで出ていたんですけども、それからもう一気に増えました。いろんなイベントに出させてもらっています。

市長：確かに、そういうイラスト、似顔絵、こういうので、ちょっとしたのをお願いしたいなという方って、意外といらっしゃるんだけども、かく言う私もそうなんですが、どこにお願いしていいのか分からないから、ネットで探しちゃったりするというのは、地元でつながれるとすごくうれしいですよね。
　もう一人、お仲間っぽい、小西山さんは、どういう関わり方をされていたんですか。

小西山さん：小川さんは、私も所属しているカンガルー宮前子育てねっとわーくのカンガルー通信に、それこそ情報として、サンフェスタの情報を載せてほしいということをお願いされて、それもやっぱり、こういったつながりのある方たちの情報を載せるページがあったので、そこに掲載をしていました。今、彼女自身、会員の方だったので、そういった形でつながっておりました。

市長：カンガルー。

小西山さん：カンガルー宮前子育てねっとわーく。

市長：子育てねっとわーくでつながって、そうしたら小川さんは、サンフェスタをやっていたということですか。

小西山さん：はい。それで、サンフェスタはお手伝いの声をかけられたりして、そこでまた、そのイベントに参加されていた方とも知り合いになり、その方も、いろんなところでイベントをやっていらっしゃるんですけども、私も、いろんなママさんと、ママさんのネットワークですね。ママのネットワークで、イベントの参加だったり、そんな感じで、多分、その間、やっていた７団体です。

市長：いや、ありがとうございます。
　そういう意味では、つながりがつながりを生んで、どんどん広がっていくという理想的な形になっていますよね。
　先ほどの小川さんのコメントで、「ウェルカム感」が薄かったというふうな話で、特に、最近の区民車座集会で話しますと、やっぱり、お母さんが疲れていると、ママたちが疲れていると、子供たちも元気がなくなっちゃうということなので、子供たちの笑顔を増やすためにも、お母さんに月に何回かは、余裕と楽しみをというような、そんなお声というのはたくさん聞きます。そういうのが、ママさん同士がつながっているというのは、何かすごくすてきですよね。だから、そういうのがいっぱいあると、地域の細かなエリアでですね、たくさんあると、「ウェルカム感」が出てくるのではないかなと思わせていただきました。ありがとうございます。
　では、ありがとうございました。

（拍手）

市長：それでは、続いて山口さんに、発表いただきます。よろしくお願いいたします。

山口さん：皆さんこんにちは。有馬・野川生涯学習支援施設アリーノの指定管理者を担当しています、山口と申します。よろしくお願いいたします。
　今日は、アリーノのこども食堂について、発表させていただきます。
　私、指定管理者という立場で、公共施設を市から運営管理を任されております。その施設が、なぜこども食堂をやっているかということを説明させてもらいますと、こども食堂は、どちらかというと、マスコミ等では、貧困だとか、生活困窮者のためのこども食堂というように言われていますけど、実際、ほとんどそうじゃなくて、地域の子どもたちのためにつくられているこども食堂がほとんどです。アリーノの使命は、地域交流を通じて、地域の活性化を図るということだと思っています。それには個人だけじゃなくて、ちょっと生涯学習という名前はかたいんですけども、もっと広く言うと、まちが活性化すればいいというふうに思っていますので、そのためにこども食堂を行いましたと。
　そこにありますように、中身は、地域の子育て世代がそろい、ふれあい、仲間づくりの場を目指しますということと、地域の子どもの成長を応援しますと。そういう形で、ただ人を集めるだけでなくて、そこに関わる人たちも育てるというか、一緒にやりましょうということで、そこに書いてありますように、食堂を利用する人、食事をつくる人、また、そこでの提供するという形で、この３者が一体となってつながって、子

供たちを育てようということのネットワークをつくるということでやっております。単に食事を提供するだけじゃなくて、そういうつくるボランティアというんですか、活動する人と、また、さらには食材を提供する、そういうネットワークをつくりながら、地域の活動をいたしたいと思っております。

現在の状況でございますが、月２回木曜日に開催しております。食事のいただける時間は、５時半から７時半、調理時間は、３時から５時までにボランティアさんがやっていただけると。その後、後片付けをして、大体８時半ごろに終了という形になります。参加費は、子ども２００円ということで、これは１８歳未満ということで、以前、高校生までというふうにしたんですが、ちょっとそれはまずいだろうということで、１８歳未満という条件にしています。大人は３００円、幼児は無料ということで、どちらかというと大人とシェアするという形で、大人の方の分を一緒に、幼児ですので、それで十分間に合うということになっております。

昨年５月から月２回開催しまして、今年の１０月まで、ちょうど１年半ですが、３６回開催しました。延べ参加者数は１，７００人を達成しました。毎回、約５０名前後の方が参加ですが、子どもが１，０２１名、１回当たり２８人、大人が６７９人で１回当たり１９人。そうしますと、大体、大人１人に対して、子どもが１．５人という形ですね、という形で、一番多い家族で７人で来られます。御夫婦とお子様５人、さらに４人子どもさんとか、３人と、こんなに宮前区でも多くの子供がいらっしゃることにびっくりしたんですけど、今、一人っ子とかが多いとか言われますけども、意外と大きな家族というんですか、そういう方たちが利用されています。

子供の参加する年齢は、平均すると７歳、ですから小学校１、２年生ですね。幼稚園児を中心に、上は小学校三、四年生。やっぱり中学生以上になりますと、親と一緒に来ることがほとんどないということで少ないです。

親子で仲間と一緒にということで、最初は２０人、３０人名だったんですが、現在５０名前後が毎回来ますので、部屋を三つ使っております。会議室を使ったり、和室ですね、畳の部屋ですと、これは大人気で、小さいお子様たちが、畳の部屋だと、いろいろとくつろげるということで、大変、和室は利用されております。

続きまして、こちらは会議室でやっている、２部屋一緒に使っている風景でございますが、親子で来る場合、お父さんも時々参加されます。月に２回ですので、毎回は難しいと思いますけども、時々お父さんがかわりに来た、あるいは夫婦で来られたりというようなこともございます。

右側は、やっぱり、メニューで一番人気はカレーライスですね。子どもに人気がある。これは、実はおかわりをしているんですが、大変小さいお子さんを中心に、カレーライスは大人気でございます。今、顔出しされていますけど、全てこれ、本人さんの了解をとっていますので、個人情報についても、それはクリアしているつもりでございます。

メニューについても、いろいろやりまして、たしか、２０回までは、毎回メニューを変えてありまして、左側ではコロッケですね。右側はハンバーグの定食ですが、後ほど、参加されますと思うんですが、曽我さんという料理家の方、地元の方にメニューをつくっていただいたような形で、ボランティアさんにも、いろいろな方に参加いただきまして、毎回工夫されてつくられております。

食事するだけじゃなくて、食後も交流しようということで、遊び場をつくっております。お子さんは食べるだけじゃなくて、遊び場になるとすごい元気です。もう走り回るぐらいですね、元気に活動されています。大変、そういう意味では、交流ということなのか、同じか、大体歩いてくる方がほとんどですので、同じ小学校、同じ幼稚園の仲間がいっぱいいて、さらに盛り上がるということでございます。

食事ですので、マナーとか、ルールも教えるということで、まず手を洗ってもらうことと、ごちそうさまを言いましょうと、あるいは、食器を片づけましょうというようなルールを守ってもらっております。

もう一本の柱のボランティアさん、これも大活躍をされていまして、延べ５００人の方が、１年半で参加

いただきました。大体、平均１４名ぐらいですけども、２０代の学生さんから、７０代の方まで、学生さんも時々、授業の一環で単位の都合か知りませんけど、ボランティア体験をしたいと急に申し込まれて、来る方もいらっしゃいます。そういう方も含めて、７０代ぐらいまで幅広く参加されております。

食材提供も、実は、地元の農家さんからたくさんいただくんですけど、最近では果物ということで、宮前メロンやナシもいただきました。あるいは、最近、事業者さんが多いんですが、増えてきまして、おうちＣＯＯＰさんですね、生協さんからは、調味料や乾物、ＮＨジャパンさんから肉をいただいたり、あと、個人提供では、時々、田舎から米を３０キロ送ってきたので、こんなに食べられないから使ってくださいというようなお申し出もあったり、お歳暮、お中元でお菓子をたくさんもらったけど、こんなに食べられないから、皆さんで分けて、そういうような個人の提供もございます。

今後のことなんですけども、やっぱり、ずっと続けていくに当たっては、安心安全の確保ということで、まずアレルギー対策ですね。必ず初回申し込みに、アレルギーのあるかなしを確認して、もしアレルギーがあれば、やっぱり御遠慮願ったりというような形をとっています。

あと、衛生面では、給食担当というか、給食の経験のある方なんかの知恵をかりながら、生野菜は一切出さないと、必ず野菜でも火を通すとか、そういう面では、衛生面、安全面には気をつけてございます。

あと、ボランティアさんの確保。これは本当に、無償のボランティアさんですので、本当に頭が下がるんですが、他人のために御飯をつくるということは大変なことですけども、皆さん、大変協力をもらっています。無償のボランティアさんを続けて維持するためにも、皆さんも、募集していますので、御興味のある方は、ぜひ応募願いたいと思います。

あと、こども食堂の組合団体の育成ということでは、やはり、１年半続けましたけども、いずれは、やっぱり独立した形の運営母体にしまして、アリーノという生涯学習支援施設で専門にやるわけにもいきませんので、そういう人材が育った形では、運営団体として頑張ってもらいたいという指導もしていきたいと思っています。

また、地域の多世代の交流につなげることは、地域の活性化といいましたように、アリーノでは、図書室の中に学習室があり、集会室などもあります。地域の方々がいろいろ集まる場所、集って、楽しんで、学ぶ場所という形で利用してもらえれば、ありがたいと思っております。これからもいろんな形で、地域に貢献したいと思っていますので、よろしくお願いします。

続きまして、一応、私どものボランティアさんであり、利用者でもあります関さんのほうから、こども食堂に参加したきっかけとか、お話ししてもらいたいと思いますので、お願いいたします。

関さん：関と申します。よろしくお願いいたします。

きっかけなんですけれども、幼稚園の友人から、こういったこども食堂があるというのを聞いて、ちょっと、おもしろそうだなと思ったのと、あと、娘が来年から小学校に上がるので、給食が始まるんですよね。それで、ちょっと、いろいろ給食の練習も兼ねてということで、通わせていただきました。

私事で大変恐縮なんですけれども、主人が飲食関係の仕事をしているので帰りが遅くて、夕食は私と一人っ子の娘と二人でになってしまって、そうすると、やっぱり、どうしても、夕食にしても、お弁当にしてもなんですけれども、娘の好きなものに偏ってしまいがちで、食べてくれるものを出したいという感じで。それで給食になって品数がいろいろ増えると、あれ食べられるかな、これ食べれられるかなと、すごい心配して困っていたんですけれども、こども食堂に行くと、いろんなおかずが、もう満遍なく４皿５皿と出していただいていて、酢の物だったり、あえものだったり、家だとどうせ食べないだろうと思って私が作らないようなものも、ちょっと一口でもいいから食べてみなさいといって褒めながら、おだてながら、一口ずつ練習をしているという感じです。

それで、今はちょっと、口コミで、こういった楽しいこども食堂というのがあるよというので、幼稚園の

お友達も、結構、複数こう、来るようになって、子供も友達も来て楽しいというのがありますし、あと、何ていうんでしょう、何々ちゃん、これ全部食べてすごいねと褒めると、やっぱり競争心もあおられて、子どもたちも、ちょっと競争しながら、一生懸命、野菜を食べたりとかしたり、そういうのもいいかなと思います。

あとは、例えば、家で、具体的なところを言うと、小松菜だったり、ゴボウだったり、レンコンだったり、そういうのは、ゴボウ、レンコンをハンバーグに、みじん切りにして隠して入れたり、小松菜をお好み焼に刻んで入れたり、細かくして隠して食べさせていたんですけれども、こども食堂で、普通におひたしとして出されると、意外とごまあえだったら食べたりとか、親として目からうろこが本当にもう、多々あって、いろいろ勉強になるかなと思っております。

あとは、調理のボランティアのほうなんですけれども、私、ボランティアに参加させていただいたのが、本当に最近なんですけれども、そうですね、今まで恥ずかしながらボランティアと名のつくものに、ほとんど参加したことがなくて。宮前区に越してきて、子育て支援センターなどで、すごいお世話になって、やっぱり、ボランティア活動で、料金を払わずに参加させていただいたり、やっぱり、そういったこともあったので、私からも何かできるときに、ボランティア活動に参加する機会があればいいなと思って、そうですね、そういう気持ちもちょっとあり、あと、娘の記憶に残るかどうかが、ちょっと微妙なところなんですけれども、自分の母がボランティア活動をしている姿を見てもらって、娘には、やっぱり、私はお恥ずかしながら、本当に５０間近になって初めてのボランティアだったんですけれども、娘には小さいうちから、そういったボランティアというのも意識しながら、成長していってもらえたらいいなという願いもあります。

あと、調理のほうで、私自身も、保育園の給食の調理の経験者の方々もたくさんおりますので、すごい衛生面だったり、安全面だったり、勉強させていただいている部分もあります。先ほど市長さんのお話にもあったんですけれども、子育てのスタートとほぼ同時に宮前区に越してきて、こうやって、なかなか地域とかかわるきっかけというのがなかったんですけれども、こういった機会を与えていただいて、アリーノさんには、とても感謝しております。

以上です。

（拍手）

市長：どうもありがとうございました。

山口さんと、関さんと、すてきなプレゼンテーション、ありがとうございました。

たまたまなんですけど、先月の区民車座集会、川崎区でやったんですけれども、そのときのテーマが、こども食堂でやったんです。事前に私も、こども食堂を見ておきたいなと思って、３カ所だったか、市内に３カ所ぐらい回らせていただいて、アリーノさんのところにもお邪魔しようかと思っていたんですけど、ちょっと時間が合わなくて行けなかったんですけれども、最初、冒頭、山口さんからお話あったように、こども食堂って、生活困窮している方とかというふうなイメージが、最初、そんな話だったんですけれども、実はそうなっているところって、本当に、ほとんどないですね。地域がつながる場というふうに捉えて、居場所のような形で捉えて、いろんな形で地域でやられていて、区によって多少の差はあると思うんですけれども、各区に大体３カ所ぐらいずつあるような、区がそれぞれ把握しているだけでもですね。そんな形でやっておられるところがあるんですけれども、月２回というのは、多いですね。多いというか、大体月１回というふうなのがパターンかというふうに思うんですけれども、もう一回ぐらい、僕が見たところですね、もう一回ぐらいできますかね、月にと言ったら、いや、それは難しいというふうに言われていたので、月２回やられているというのは、定期的に３６回これまでやってきたというのは、すごいことだなというふうに思いますし、大変だろうけれども、関さんのようなボランティアの方とか、曽我さんも、そういう協力されたという

話ですね、という形でやっておられるから、すばらしい取組をしていただいていると思っております。
　ちょっと僕、事前にスタッフから聞いていたんですけども、アリーノさんのこども食堂、食材提供をしていただくところに、お肉を提供していただいているところの話を、ちょっと補足的におっしゃっていただいて、切り落としを何か、ハムとかをやっている加工の会社ですね。

山口さん：日本ハムさんの子会社で、川崎区にあるんですけども、ある方の御紹介で、紹介の紹介で来たんですけども、食肉加工って、卸ろしをしているわけですね。そのカットした端切れというか、端肉をまた加工していただいて、５キロとか、７キロとか、まとめていただくような形で。その、我々、取りに行くのも大変ですので、彼らが冷凍のまま持ってきてくれるというような感じで、協力をもらっています。

市長：それは大きいですね。

山口さん：やっぱり、食材の中で肉が一番高いですから。

市長：そうなんですよね。
　実は、他のこども食堂でも、やっぱりお肉、大変で、お金が大変だよなというのが一番、お米とかは先ほどおっしゃったように、ちょっと使ってと持ってきてくれるところがあるんだけど、お肉は、なかなか、ちょっと調達しづらくてというので、そんな仕組みを発見されたんですね。

山口さん：実は、教育委員会のある方からの紹介なんです。教育委員会の方の知り合いの方が会社をやっていて、その関係で私どもも紹介いただけまして、最近始めたんですけど、今のところなってきております。

市長：川崎区ですか。

山口さん：川崎区でやっています。

市長：食肉流通センターですかね、中に入っておられる、川崎区の東扇島のところに、食肉センターというのが、首都圏の中でも最大規模のがあるんですね。そこに食肉の会社がいっぱい集まっているんですけれども、もしかしたら、そこの中の一部かもしれませんね。ちょっと、でも、これはいい話を聞いたので、いいお知恵をいただいたと。僕たちも、食肉センターとかにちょっと当たってみようかなと。そうすると、ほかのところでもつながるところが出てくるかもしれないですね。アリーノさんのところは、ちゃんと、妨害しませんので。

山口さん：いやいや。ですから、企業さんが、大変、社会貢献という意識も高まってきますので、いい形でお話しできればいいかなと思います。地元の農家さんは、個人的にいろいろと、お付き合いいただいたりしていますけど。

市長：すばらしいですね。本当に、ちょっとここで聞いてみたいなと思うんですけれども、上村さん。上村さんは、実は私の子どもが通っている学校のＰＴＡ会長さんなんですけども、宮前区のＰＴＡの会長さんでもあるので、実は、こういうこども食堂をやると、いろんなものが見えてきたりってするというんですね。この何カ所か行った中で聞いてきました。それは、あ、どうしたんだろうとかという子どもの変化みたいなものに、誰かが気付いてあげる、そういうきっかけだったりですね、なかなか行政機関で見るときというの

は、ちょっと事態が深刻になっていたりとかというときには、連絡はあるんですけど、そうじゃない、もう少し早目早目のお互いの住民同士のつながりの中で解決できる課題というのは、そういうところから、居場所みたいなところから発見されるというふうなことを聞いています。
　宮前区の中でもいろんな子どもの課題があると思うんですけれども、ＰＴＡ会長という立場、あるいは、子育てをしている立場からして、こういうこども食堂の取組みたいなのは、どういう感想をお持ちでいらっしゃいますか。

上村さん：まず、一言で言うと、すばらしい活動だと思います。ＰＴＡ活動って、多分、ここにいらっしゃる方も、現会員さんの方もいらっしゃると思うんですが、やはり、まだ強制感とか義務感で、やらされているというところが多いですね。でも、本当は、子どもたちのためということもあるんですけれども、自分たち自身もこう、ハッピーになれるというところがあるんですね。ただ、ボランティアであると言っている割には、やらなきゃいけないというのがある。でも、こういうこども食堂も、この一つ前のまちかどマルシェの活動も、何というんですか、誰かがこう、やりたい、多分同じように、何か悩みを持っている人とつながってよりよくしていきたいという思いが、おそらくモチベーションになって、それをどんどんどんどん広げていってというすばらしい活動と思いました。なので、ＰＴＡというのも、そうなっていきたいなと、私個人は思っています。ちょっとそこを、どうしていこうかなというのは、もう本当、ここ何年ですかね、何年か悩み続けているところでもあります。

市長：ありがとうございます。でも、本当に関さんのように、ボランティア活動に初参加という形という、何かすごく、いいコメントだったなと思うのは、子どもさんにボランティア活動を見せるということもそうだし、好き嫌いなものを、新たな子どもさんの発見が見つかるというのは、ほかのこども食堂を見ても、ママさんに僕、ちょっとインタビューして聞いてみたんですよ。どうですか、どうですかと聞いたら、何と、ここだと野菜を食べるようになりましたと。今まで全く野菜、このトマトを食べなかったのが、トマトを食べるようになりましたとか、毎回毎回、子どもに驚きがあるというんですよね。それは、先ほどのコメントのように、みんなで少し褒めてあげたりとか、競争心をあおるとかという、そういうふうなことをすると、何か違う子どもの成長が見えていいんだなんてという話をされていました。それだからこう、自分もボランティアで提供しているけども、自分にとってもいいことがあるというような流れになってくると、ＰＴＡ活動もすごく活性化してくるかもしれないですよね。

上村さん：そうですね。

市長：会長、大変だと思いますけど、よろしくお願いいたします。
　伊原さんは、今、子育て中。

伊原：はい。そうです。

市長：ですね。どうですか。まだこども食堂という感じではないと。一緒にね、お母さんと一緒にこども食堂で、どのぐらいのお子さんですか。

伊原：今、２歳と０歳です。

市長：２歳と０歳と子を連れて、こども食堂とかどうですか。

伊原：ちょっと、私、恥ずかしながら、全然、こども食堂がこの辺にあるということを知らなかったんですけど、今２歳の子は保育園に通っていまして、先ほどお話にあったように、やっぱり、みんなで食べる、子ども同士とか、みんなで食べていると、嫌いな物を食べたりとか、そういう、私も食べるんだ、友達が食べているから、私も食べるんだみたいなのがあって、やっぱり、いいんだなということを感じました。ただ、やっぱり、私が無知だったというのはあるんですけど、こういうのがあるんだという、せっかくいいのがあるのに、新しい親に情報がないというのは、ちょっと今聞いていて残念だなというのは思いました。

市長：そうですね。先ほど小川さんのいただいたコメントが、後で、ちょっと私、コメントしますね。情報提供の、どうやってみんなに知らせていくか、伝えていくかという仕組みづくりについては、後ほど僕、コメントをしたいなと思います。ありがとうございます。
　田中さんにも、コメントをいただいていいですか。この今回の取組、あるいは、こども食堂のことでも、あるいは、ほかのことでも結構ですけど。できれば、今の取組について、コメントいただけるとありがたいです。

田中さん：今までの発表で出たマルシェだったり。

市長：はい。

田中さん：マルシェについても、言葉では聞いていたんですけれども、どこでやっているというのは、私も情報として余りなくて、こども食堂のこともそうなんですけど、情報がやっぱり入ってきていなかったです。今お話、初めて伺って、すごいわくわくして、行ってみたいなと、すごい思うので、ぜひ情報を発信していただけたら、両方に足を運ばせていただきたいなと思います。

市長：ちなみに、こども食堂の存在は御存じでいらっしゃいましたか。

田中さん：こども食堂の存在は、テレビでもメディアとかを通して知っていて、この辺でもやればいいのにと思っていたんですけど。

市長：それが、アリーノでやっていることは知らなかったよということですね。

田中さん：知らなかったです。私、犬蔵在住なんですけれども、遠いから知らないのか。

市長：そうですね。ちょっと離れていますね。

田中さん：割と、市政だより的なものは好きで見るんですけど、それでも私はわからなかったので。

市長：ちなみに、こども食堂は、どういうふうな情報発信のされ方をしているんですか。

山口さん：大変難しいんですけど、今現在、５０名ぐらい、大体参加されるんですが、キャパシティの問題からすると、本当にもう、それなりいっぱいだなというのと、基本的には、地域の方が歩いて来れる範囲でないと。実は犬蔵から来た方がいらっしゃって、車を使って。こども食堂のために交通費を払ってわざわざ

ここまでというのも、変な感じもしますので、できるだけ、ボランティアさんも、ほとんど地域の方ですので、そういう交流からすると、歩いてこられる範囲の方に情報発信をしているというような状況ですので、当然、アリーノのホームページとか、館内では告知をしますけども、宮前区の２４６からこちらの有馬・野川ぐらいまでの範囲ということで発信をしております。今、たしか宮前区にもう一カ所、こども食堂をやっているところがありますけども、川崎市全体でも２０カ所ぐらいと聞いておりますので、まだまだ少ないんですけども、やはり、全国ネットでやるわけにもいきませんので、地域ごとにそういうのがどんどん増えてくると一番いいのかなと思いますけど。

市長：ありがとうございます。
　最後に１点、ちょっと聞かせていただきたいのが、ボランティアの数が非常に多い、５０人ぐらいとおっしゃりまして、１回当たり１４名。

山口さん：今、登録人数で３５名ほど。やはり、皆さん御都合もありますので、その中で来る方が１４名ぐらいということで。

市長：どういうふうに、呼びかけられたというか、参加していただいたんでしょうか。

山口さん：３時間から８時半まで時間がありますので、皆さんの都合のいい時間で結構です、と。そうしますと、調理する時間の前半３時間の方と、５時から来て後片づけ、あるいは配膳をする方と、３交代ぐらいでこう、参加してもらうと。そうすると、自分が出やすい時間でもいいですよ。ですから、配膳、片づけ専門の方もいらっしゃいます。その方は、働いた帰りに寄ったり、家の用事を済ませてから来ると。前半の方は、まずここで終わって、今度は自分のところの夕食を５時に帰ってつくると、そういうような方もいらっしゃいます。ですから、できる範囲で結構ですという形で呼びかけると。ですから登録制で、その都度、十数名の方に来てもらうという形です。

市長：ありがとうございます。すばらしい取組、ありがとうございました。

（拍手）

市長：それでは、３団体目、中田さんから。よろしくお願いいたします。

中田さん：じもたんｋｉｄｓの中田と申します。どうぞよろしくお願いします。
　じもたんｋｉｄｓというのは、宮前区の小中学生の子が、宮前区で働く人を取材して記事を書いて新聞をつくるという活動をしています。こういった新聞の二月に一遍、発行しておりまして、地域で配布しています。また、年に１回なんですけれども、子供たちの１年間の記事を、こういう冊子にまとめまして、「宮前の働く人事典」という名前をつけているんですけれども、これをつくって、これは宮前、富士見台小とか、宮前平小とか、あの辺の近隣の小学校五、六校に、毎年３月ぐらいに配布させていただいています。このように活動をしています。
　何で子どもが取材というところなんですけれども、もともと私、業界新聞で記者をしておりまして、家電、冷蔵庫とか、洗濯機とか、そういう本当にふだんに使われる日常のものの取材記者をしておりました。本当日常のものから、意外と話を聞くと、世の中のことが見えたりとか、開発者の思いとかを聞いたりすると、自分自身がその製品に思い入れを持ったりとか、そういう何か楽しい体験ができるな、取材っておもしろい

なとずっと思っていたので、子供たちにも、身近なことからいろんな楽しいことがわかるんだよというのを伝えたいなという思いから、この子供の取材というのを始めました。

そしてもう一つ、子供たちに地域で出会ったときに、気軽に何か、おはようとか、挨拶ができるような、大人の友達をたくさんつくってほしいなという思いがあって、それもあって、この活動を始めました。

この活動は実は２０１４年にスタートしまして、今年で５年目を迎えます。ずっとやっていて思うのは、そういった先ほど申し上げたような効果もあるとともに、もう一つ感じているのは、子供たちの取材とか記事をきっかけに、大人の方も何か地域につながるきっかけになっているような気がしています。

どういうことかといいますと、子どもさんたちが取材して帰ってきて、お母さん方に今日、こんな取材してね、こんな人がこう言ってねみたいな、そういった話をする。そうすると、お母さん方がそのお店に興味を持つ。あるいは、私たち新聞も、実は公園でも配布したりするんですけれども、そうすると、子どもたちが取材して記事をつくっているんですと話をすると、すごく興味深く読んでくださいます。

実は学校に配布している事典についても、校長先生方からすごく評価を得ていまして、なので何か子どもが書いた記事というのが、すごく何か地域をつなげる力になっているなというのをとても感じて、ちょっとここに子どもの取材をきっかけに、子どもと保護者と地域と学校といろいろつながるきっかけになっているんじゃないかなと、そういうふうに感じております。

実際の活動の様子なんですけれども、これはそちらにいらっしゃいます区長を今年の８月に取材させていただいた様子です。すごい大人気で、実はこの後もすごくテンションが高くて、区長の取材の後は市長を取材したいとか、安倍首相を取材したいとか、オバマさん、大統領、アメリカのトランプさんを取材したいとか、すごい盛り上がったりして、なので是非市長も時間があれば、ｋｉｄｓの取材をお願いします。

こちら、有馬にある梨園、持田さんの取材のときなんですけれども、こんな感じに子どもたちが大人の人と対面して、じっくり３、４０分ずっと話をするんですね。そうすると、子どもたちにとっても、この人に対する関心が湧いたりとか、この人がやっていることに対する関心が湧いてくる。そういったことが、何か地域につながるきっかけになっているんじゃないかなと感じています。そういった取材を幾つかしていますよという話なんです。これは珈琲屋さんの取材ですね。

この取材を実は５年間してきて、はたとカウントしてみると、取材先の数というのが 120 名を超えました。これはかなりの資産だなと思っておりまして、今年あたりから取材して終わりじゃなくて、この資産を活用して、もう少しこのつながりを生かすような取り組みというのをちょっと始めています。

その一つが、この夏休みに初めてやったんですけれども、じもたんｋｉｄｓで取材した先のネットワークをつくって、夏休みの子どもの自由研究をするのに、その地元ネタを使って自由研究をしてみませんかという講座を開きました。実はここの講師にいるのがじもたんｋｉｄｓのお母さんで、そういう自由研究の得意な方だったので講師をお願いしました。という講座を開いたり、あと、これは去年から始めているんですけれども、じもたんｋｉｄｓとｋｉｄｓのファミリー、それから取材先の方々に声をかけて、今までは子どもから聞いた話だったり、新聞だったりで見ていた人とリアルで会う場をつくろうという形の、これは夏にやったので納涼祭と言っているんですけれども、そういった場をつくったりと。なので、取材だけではなくて、いろいろなアプローチでつながりをつくる場を、今、つくり続けているのかなという活動をしております。

今日はその中でも、記者として活躍してくれている、まずは小学３年生の小田嶋千春ちゃんにお話を聞きたいと思います。

千春ちゃんに聞きたかったことは、じもたんｋｉｄｓの活動の中で楽しいことは何ですか。

小田嶋さん：ふだん見ないもの、道具とかを見たりするのが楽しいです。

例えば、マイナス５０度の冷凍庫に入ったときとか、そういうときが楽しかったです。

中田さん：これまでの取材の中で印象に残っている取材はありますか。

小田嶋さん：子どもの町の取材です。
　なぜかというと、子どもの町に子どもの市長選挙があって、それを見たのがすごくおもしろくて楽しかったからです。

中田さん：ありがとうございます。
　じゃあ、次に。

（拍手）

中田さん：小学３年生の子どもなので緊張していると思います。ありがとうございます。
　次は、小学３年のころから活動に関わってくれて、今、中学１年生の秦野真愛さんにお願いします。

秦野さん：私は小学３年生のころから、じもたんｋｉｄｓとして活動しています。その中で、小学５年生のときに、『オオカミの護符』の著者である小倉美恵子さんを取材して、宮前区の文化や風習について知りました。それをきっかけに、宮前区の歴史や成り立ち、このまちについて調べて、このまちの成り立ちについてを知ることができました。
　ことし、じもたんｋｉｄｓで取材したことのある翻訳家である、さっきのまちかどマルシェに出ていた辻麻里子さんの「田園都市を翻訳し直す」という講演会に出席しました。そこでは、イギリスのエベネザー・ハワードというまちをつくったりする人の田園都市構想について触れることができました。そして、まちづくりについて関心を持つようになりました。
　また、私は、先月まで４回にわたって開催された「宮前区のミライを考えるさぎぬまプロジェクト」に参加をしました。そこで、宮前区役所及び公共施設の鷺沼駅移転に伴う議論が交わされました。
　この議題については、私が今通っている宮前平中学校でも校長先生が触れていて、生徒会長らが区長と語ろうという会にも出席したりしました。
　この二つのことを通して、私は、今回の車座集会のテーマである「子どもや若い世代が住み続けたい、ふるさと宮前区」をつくるためには、宮前区について話し合って考えていけるような区にすることが大切だと思います。区民が一つになることで、さぎぬまプロジェクトのような問題について話し合ったりして、このまちをよりよくしていきたいと思える若者をふやすことが大切だと思います。
　このように、私はここ数年でじもたんｋｉｄｓを通して宮前区のさまざまな人に出会いました。そして、そこで多くのことを学んだり、多くのことを知ったりすることができたので、これからも地域の人のつながりを大切にして、そのつながりを続けていきたいと思っています。
　また、今、私は、料理家の曽我真由美さんのお料理教室に通っていて、また、つながりをふやしていきたいと思っています。

（拍手）

中田さん：ありがとうございます。
　曽我さん、よろしくお願いします。

曽我さん：すごく子どもたちがピュアな、その後にすごくやりにくいんですが、皆さん、こんにちは。私は

宮前区の犬蔵で料理教室をしております、曽我真由美です。
私がｋｉｄｓの取材を受けたのは３年前なんですけれども、子どもが取材をするというもの、今までの雑誌の取材とかとは違い、子どもがやるということで、すごくかみ砕いて説明しなきゃいけないとか、あと、ストレートにきっと質問が来るだろうから、私のほうがすごく緊張していたんですけれども、すごく答えるために自分の活動の棚卸というか、棚卸と今までの何でこんな活動をしたのかという振り返るきっかけをいただきました。
できた記事を見ましたら、すごくいっぱい話したんですけど、ああ、ここを切る取るんだというようなことがいっぱいで、すごくすばらしい記事だったんですけれども、それをいただきまして、これはぜひ私の活動に使わせていただきたいと思い、いろいろ料理家もたくさんいますので、お仕事をいただいたときにそれを持って、こういう活動をしていますというものに使わせていただいています。
私の宣伝だけではなく、宮前区でこんな人がたくさんいるんだという宮前区の宣伝にもなり、すごくｋｉｄｓの新聞はすごく興味を持っていただいています。
あとは、ほかの取材を受けた人のコラボ、私は真ん中、てかてかの顔なんですけれども、皆さんと交流できてすごく楽しいんですが、私がすごいなと思ったのが、本当だったら大人が中心として、子どもの感情をつくるというような形が今多いと思うんですけど、ｋｉｄｓ、子どもが中心として大人の感情をつくっているというようにすごく感じて、すごくいい、本当につながりを持っているというのはいいなと思いました。
あとは、地域のつながりだけじゃなく、ｋｉｄｓのお母様ともつながりを持てまして、私も子どもの料理教室、今、真愛ちゃんが通ってくださっているんですけども、教室のきっかけをいただいたのも保護者の方からお話をいただきまして、やる会場も実はｋｉｄｓのつながりでお話をいただいたりとかして、私、活動を広める立場でありたいと思いながらも、実は広めさせていただいているんだなというのはすごく感じて、この恩返しのためには、これからもいい料理とか、そういう伝えるほうになっていきたいと思います。
ありがとうございました。

（拍手）

市長：ありがとうございました。
おそらく区民車座集会で最年少出席者じゃないかと、これまで４０回やってきていますけど、小学校３年生っていなかったかな。最年少です。おめでとうございます。すばらしいコメントでした。

（拍手）

市長：中学校１年生の秦野さん。びっくりするような立派なコメントでうれしいなと。でも、これが小学校３年生からずっと４年間続けてきた取材活動が、こういう形で少なくとも秦野さんの今を形づくっているんだなというふうに思うと、この活動の意味がものすごく分かりやすく出ているなという気がしました。
何よりも、やっぱりコメントにありましたけど、大人同士というか、子どもからつながる地域というのを実現させてくれているなと思いましたね。
確かに子どもつながりって大きくて、幼稚園だとか小学校だとか中学校だという、そこでのパパ友、ママ友というふうな形になるんですけども、それを超えたところの軸とか、ほかの軸ってなかなか形成しづらいんですけど、こういう形でやってもらうとより広がりが出てきますよね。学校だけではない世界観というふうなのが出てきて、すごいなと思いますし、１２０名を超える取材をしているというのは、これはまことに財産で、さっきの佐藤さんの話じゃないんですけど、実はこんな人たちがいたんだと。この地域に、こんなすばらしい人たちがたくさんいるというのをなかなか知ることができないのを、こういう活動を通じて知る

ことができる、子どもたちを通じて知ることができるというのは、本当に宝探しで、みんなで宝を共有しているような、そういう印象を受けました。ありがとうございます。
　特に記事からこういう交流会みたいなリアルな展開にまでもっていっているというふうなのが、ここがやっぱり大事ですよね。ここ、大事ですよね。さっきのマルシェじゃないですけど、こういう形で人が会えて接する、会話をする、一緒に食べる、飲み食いする、遊ぶという、こういうような形にしていくと、何か本当につながってくるなという印象がありますね。
　まだ、ちょっと御発言いただいていない方、お話しいただければと思いますけど、栗原さん、どうでしょう。今の取り組みなんかを聞いていただいて。

栗原さん：神木から来ました栗原です。看護師を２５年ほどしております。
　子どもの目線で地域の人材、地域の資源になると思うので、それを発掘してみんなに知らしめて、それをまた発掘にどんどんつながっていって、とてもすばらしい取り組みで、以前から存じ上げていていいなと思っておりました。
　こちらにいらっしゃる方は皆さん能力が高くて、いろんな人ともつながることができてすばらしいと思うんですけど、でも、すばらしいのは、地元にいらっしゃる普通の方々もそれぞれの歴史を持っていて、いろんな能力を持っていて、楽しく静かに暮らしている方もいらっしゃって、そういう方もいらっしゃるんだということ、障害者の方とか、そういう方もいらっしゃるということを私は知っているんですけど、ほかの方も知ってもらえたらいいなと思って、コミュニティーカフェを宮前市民館でやっていて、平日の日中にしていますので、いらっしゃるのはお年寄りの方とか、小さなお子さん連れのお母さんとかがいらっしゃるんですけども、何でもないことでお年寄りが折り紙を一つ折ってくれただけで小さい子は大喜びをしてくれて、そういう小さな交流もすごくいいなと思っていて、そういう居場所をあちこちに、歩いて行けるところに、今日のお話を聞いていて、歩いて行けるところに置いてもらえたらいいなと思いました。

市長：栗原さん、看護師さんでいらっしゃるんですか。

栗原さん：はい。

市長：２５年間看護師をやられていて、このコミュニティーカフェをやろうと思ったきっかけって、それはやはり職業的なところから来ている部分ってあるんですか。

栗原さん：ちょっと長くなってしまうかもしれませんが、病院に１０年ぐらいいまして、その後クリニックに行って、子育てをしようと思ったんですけど、ちょっと忙しくなってしまって、そこに６年ぐらいいて、そこから障害者の施設とかお年寄りの施設に行ったんですけれども、なかなか皆さん元気がなくなってから来てしまうところで仕事をしていましたので、これは地域から元気になったほうがより多くの人が元気になるんじゃないかなと思って、その楽しくわくわくする活動を少しずつやっていけばいいなと、元気になるし、自殺する人とか、ひきこもりになる人とか、いじめが起こらないようにとか、そういうことに一人ひとりが小さなことをやっていけばつながるのじゃないかなと思って、コミュニティーカフェを始めました。

市長：すばらしい活動をしていただいていますね。ありがとうございます。
　大半は、平日の昼間の時間帯ですか。そうすると、参加されている方たちは主に高齢の方が多いという感じでしょうか。

栗原さん：御高齢の方とか、あと図書館に併設されている場所で貸していただいてやっていますので、図書館に来られたお休みの方、辻さんにも来ていただいたこともありますし、あちらでもコミュニティーカフェをやっている方もいらっしゃって、割と中高生以外の方、大学生以外の方がいらっしゃいます。

市長：そこは本当に多世代に大分なっている感じで。

栗原さん：そうです、そうです。

市長：すばらしい。

栗原さん：その交流が生まれていて、大体生涯学習の募集で始まったコミュニティーカフェなんですけれども、３年たつと出てくださいと言われるんですけれども、御厚意でそこでやらせてもらっていて、そこはオープンなスペースで出たり入ったりが自由で、多世代の方がいらっしゃるので、そういうところ、今、移転の問題が出ていて、ちょっと私も活動ができなくなるんじゃないか、そういうオープンなスペースがなくなるんじゃないかと思って、すごく心配しているんですけども、そういうところが鷺沼にもあり、宮前平にもあり、あとは向丘出張所とかでもカフェをしていますし、支所、菅⻍のほうでしたっけ、支所もありますから、そういうところでも活動が広まっていければいいな、そしたら、みんな疾病予防、健康増進で元気な方がふえて、地域がよくなっていくのではないかと思っています。

市長：ありがとうございます。すばらしい活動とすばらしいコメントをいただきまして、ありがとうございます。
　秦野さん、すばらしい取材対象がまた、栗原さんを是非、今度じもたんｋｉｄｓで取材していただきたいな。ありがとうございます。また、皆さんに参加していただきたいと思います。
　発表ありがとうございました。

（拍手）

市長：それでは、井上さん、よろしくお願いいたします。

井上（秀）さん：ファンズアスリートクラブ理事長をやっています井上と申します。よろしくお願いします。
　今日、ちょっと朝、水球の指導をしてきたので、髪がぼさぼさなんで着帽のままプレゼンテーションをさせてください。よろしくお願いします。
　僕たちは２００８年に活動を始めました。先ほどの古泉さんの冒頭のお話で、この辺にアスリートがいっぱいいるというお話になりましたが、僕ももともと東京でやっていました。大体大学を出て、アスリートとしてこのまま続けたいという人の相談がほとんど高津区、宮前区でしか起こらなかったんです。
　なぜかといいますと、まず、日体大の子たちが多かったのが、地元に帰って強化選手のままだと、大体東京に出てきて合宿に出れないとかで強化から落とされると。このまま大学院であったり何だったりというので、地元の日体大で練習したいという子たちが結構いまして、日体大を考えると、青葉台と桜新町なんで、大学生しか寮にいられない。というと、出ていくと横浜は高い、世田谷は高い。さあ、じゃあどこに住もうかといって、結構北部市場の前に住んでいたり、何だったりみたいな子たちがいっぱい出てきました。
　その後、國學院大學さんも同じような感じで、結局たまプラーザと渋谷の間に住むということを考えると、ということで、まず、その子たちとつき合っている中でそういうふうな環境にしたいんだけど、何か、結局

朝練と夜練しか出ないので、何かできないかと。

例えば、自分たちのやっているスポーツを子供どもたちに教えるとか、トレーナー学科とかの子たちからすると、例えばシニアの人たちの体を見るとかという、何かそういうことがこの地でできないかなみたいなものが、単純な、僕らの団体を組んだきっかけです。

僕はそんな話で、川崎のほうにやってきて、宮前という場所を選んだんですが、そのとき、ちょうど、今、水球も荒井君とかで大分川崎市はにぎわっているんですが、その一世代前が若松弘樹という日本代表のキャプテンが白幡台に住んでいたところから始まり、彼が川崎スイミングのコンバットで、ジュニアオリンピックでやった世代で日本代表に入っていて、その後に川崎の子たちもどんどんやっぱり日本代表を目指そうというルートができてきて、という中の、川崎もともと地元組というのもいて、それを合体させて何かやろうみたいなことが２００８年のファンズアスリートクラブの前身団体のきっかけでした。

今日は特に「ウェルカム感」という話がさっき出ていたんで、地方から日体大に来る子とか、國學院に来る子たちというのは、どこでもいいやという考えで、ただ家賃が安いから宮前区にいるという子たちが多いんですが、じゃあ、彼らの才能とか、やれていることとかを使って、何かスポーツを通してトレーナーの子たちとか選手の子たちで何か明るい未来と、あとは４年間でもいいんで、ふるさと感を感じられたり、例えばその後教職に就こうと思う子が、川崎市の小学校の先生をやろうとか、この地に残ってトレーナーで続けてみようとか、そういう子たちが出てきて何か地域と連携というか、ここの地域に必要とされる子になったらいいなみたいなところがあって、うちの理念は、スポーツで明るい未来と地域を創造するという理念で、２０１３年にＮＰＯ法人化して、２０１４年に総合型地域スポーツクラブとしても承認されて始めました。

どんなことをやっているかといったら、障害者と健常者の垣根をなくそうとか、これはＨＥＡＴ－ＵＰさんとか新田ジムさんと一緒にやっているのが、犯罪をスポーツでなくしていこうというプロジェクトをやっていたりとか、トレーナーの子たちを使って、高齢者の人たちのケアをしたりとか、そういうこととか、あとはみんなが来られるようなスペースを菅生と神木に作って、そこでみんながトレーニングできたり、集まれる場所を作ったりみたいなことと、あとは、今までそういうトップアスリートばかりスタート時はイメージしていたんですが、だんだんいろんな大学生の人たちが、特に教職志望とか、トレーナー志望とか、柔整を志望している子たちがいっぱい集まってくれ始めて、特に障害者のサポートをしている部分なんかは興味を持って来られた子たちが、場があんまりなかったので、結構集まってくれるようになりました。

今、うちで左側の青い枠組みが、来てくれている大学生の、今来てくれている学校です。

今、部活と三つ提携していまして、日体大のバーベル部と水球部と、あと國學院大學のサッカー部と、これはもう部活連携でやらせてもらっています。下は競技団体と連携しているところで、今、うちの活動を一緒にやってくれているアスリートたちがこんな感じです。

なので、こんな人たちが神木本町のそれこそ富士急なんかは山梨からやって来まして、週に１回練習をして、そのトレーニングをこうやって山梨でやっていたり、こういうウインドサーフィンだったり、この前も等々力で、田村君がヘルニアでといったのは、うちのところでずっと治療して立ったという流れもありまして、田村君のほうから、また、市長室でプロレスさせてくださいってきのう言っていたよね、という感じでやっていて、あとは川崎WSCさんのサポートもずっとやらせてもらっています。

こんな感じで、まず障害者の部分は、國學院のサッカー部の子たちがブラインドサッカーの指導とかも動いてもらって、サッカー部の子はやってくれたり、車椅子アメフトは協会さんのほうと一緒に小学校を回ったりとか、川崎WSCさんとバスケをやったりとかという中で、特にこういう車椅子の組み立てとか、メンテナンスとかって手数がすごいいるし、物も運ぶのもいるという中で、これから特に小学校の先生になろうという人たちにこういうことを覚えてもらって、もし川崎市に残ってくれなくて先生になったとしても、全国各地でこういう障害者スポーツをやるきっかけを川崎というか宮前で学んで出ていってくれるんじゃないかという期待のもとに、向こう側は日本車椅子アメリカンフットボール協会の実際理事長さんとかに来てもらっ

て、学生さんたちはその組み立て方とかメンテナンスの仕方とかを勉強したりとかという研修会とかもやらせてもらっています。

小学校の授業とかにも、宮前平小学校と宮崎台小学校に入っていまして、さっきの大学の連携というのは、水球部の子たちが宮前平小学校の体育の水泳の授業をやっていて、バーベル部の子たちが体づくりの授業を宮前平小学校で跳び箱とかも含めてやらせてもらっています。実際の学校の授業。

原口君というビーチサッカーの日本代表の選手が、サッカーの授業を宮前平小学校でやらせてもらったりしています。

あとは、自転車の選手とかが交通安全で、これは神奈川県警と組んでやっています。

高齢者もこういうふうにいろいろやっています。

時間がなさそうなので飛ばしていきますが、区民祭とか、そういうところでやらせていただいていて、その中でやっと僕らも大体自分たちがやれることができてきたんで、うちのほうも場所を神木本町商店会のほうに加盟させてもらって、スタジオというかクラブハウスを、そういうお祭りとかの人手とかを、若くて元気な奴はいっぱいいますので、なのでそういうもののお手伝いに出したり、あとは町内会とかでディスカバーウオークとかの出張所のやつとかにトレーナーを派遣して、歩き終わった人のケアをしたりとか、あとは寺子屋事業で宮前平小学校でやらせてもらったり、それ以外に本拠地をしっかり持ってアスリートと地域がつながろうということで、神木本町の町内会のスポーツ大会とかにトレーナーとか選手を派遣して、準備運動とかをさせる機会をもらったりとか、地域の方と交流しながらどんどんやっているんですが、今日は実際に学校で教えている聖心のラクロス部の選手と、あと神木本町の自治会の小川会長に来てもらっていますので、ちょっと一言ずつもらいたいと思います。

まず、実際の教職志望の子がどういう感じで活動をしていて、どういうふうに思っているか。

天野さん：聖心女子大学の今ラクロス部で大学２年生なんですけど、初等教育学専攻で、小学校の免許と幼稚園の免許を今取っている、勉強しているところで、１年ぐらい前にインターネットのボランティアとかを募るサイトでこの活動を見つけて、最初に御連絡させていただいたのが初めだったんですけど、そういうことをやっているんだというのを友達に言ったときに、何かそういうのをやりたいんだけど、余りどこで探せばいいのかとかがわからないという子がすごく多くて、うらやましいということをすごい言われて、障害者スポーツのこととかも、やっぱりこのファンズアスリートクラブに来なければ活動できなかったことだと思うので、学校に対して、もう少し、こういうのがありますよというのを知らせる機会とか、やっぱりネットとかはすごく大学生は見るので、そういうところでもう少し私たちの団体だけではなく、いろいろあると思うので、活動が広まっていけばいいかなと思います。

（拍手）

井上（秀）さん：僕らがやっているスタジオを中心に、いろいろそういう住民さんをつないでくれたり、あと、そういうふうに呼んでいただいている小川会長に一言いただければと思います。

小川さん：神木本町自治会の会長を仰せつかっております小川です。

私がこのファンズと知り合ったのは、最初はスタジオができたときに、何かスポーツジムができたのかなということでちょっと興味を持っていた中、川崎市のほうの御案内の中で、こういうクラブがあるという、うちのほうのここにあるのがそうなんだということで、最初お知り合いになって、井上さんのところに行きました。

その中で、今までもお話ししたように、本当に一生懸命やっている団体だなと感心しまして、一番最初は

昨年の向丘地区の連合自治会の講演会に来ていただいて、そのときのテーマは「スポーツの力でできる地域革命」ということで講演をしていただきました。

また、そんな中、お話がありましたが、うちのほうの自治会のほうにも去年と、ことしと秋にスポーツ大会をやっているんですが、そのときに来ていただいて、準備体操をトレーナーに来てもらってやっているということで、まだまだこれから若い人たち、どういうふうに自治会もつながっていけばいいのかなということでお話し合いをしながら、今、進めているところです。

また、先ほどもお話がありましたが、カフェも今、少し、今までは神木本町ではやっていなかったんですが、ことし向丘地区の自治会でまずは、連合自治会でカフェをやって、その中でやっぱりこれは必要なものだなと感じた中で、今、うちのほうの役員の中で、これからカフェをできるように進めていこうということで、今、考えておるところです。ありがとうございました。

（拍手）

市長：ありがとうございました。

スポーツを通じて、いろんな社会課題というものを解決しようという、そのアプローチ、それもすごく地元密着、地域密着でやっていただいていることに、本当に感謝しています。ありがとうございます。

地元の自治会さんと一緒に取り組まれているというか、これはやっぱり成功の秘訣ですね。

井上（秀）さん：今まで、例えば水球とかもマイナーなんですけど、そういう子たちが知らない近所の人たちに、どうだったのと聞かれると、すごい彼らのモチベーションというか、勝たないと帰ってこれない感が本当にできるんで、そういう意味では地元の方に知ってもらうことって、これだけ選手のモチベーションを上げられるのかというのは、すごいこの取り組みをして感じていることです。

市長：そうですよね。宮前、高津、本当に体育大学の生徒さんって多いなって、私も地元で飲むと、意外とアルバイトしている子が何かすごいアスリート体型だなと思ったら、やっぱりそういう子たちが結構多くて、常連さんのお客さんとかが、彼、今度大会だからみんなで応援してるんだかという、そういう地域密着の形ってすごくいいなというふうに思っていますし、そういう形で障害者スポーツの普及なんかも、今、川崎市でパラムーブメントというのをやっていますので、２０２０年までには全ての小学校で障害者スポーツを体験するという取組をやっていたり、様々なスポーツセンターだとかということで取り組んで、協力をいただいているということで、本当にありがたいと思っています。

特に興味深いのは、やっぱり学生さんの立場からのお話で、どうやって見つけてきたのという、気持ちはあるんだけどきっかけがない、どうすればいいんだろうというのは、何となく全体的な今日のお話にもあると思うんで、こういう形で中に人が入ってくれて、それが口コミで伝わっていくというのはすごくいい話ですよね。ですから、やりたいんだけど、場がない。やったことで、将来への役にも立っていくという、すごくいいルートがつくれているのではないかなというふうに思います。

上村さんもスポーツで、サッカーなんかで教えていただいたりしていますけど、こういう取組を見ていただいて、ちょっと感想をいただければなと思います。

上村さん：やはり一つのスポーツ、サッカー、話がそれてしまうかもしれないんですけれども、子どもたちは例えばサッカーであれば、今、プロサッカー選手になりたいという夢を持つ子が多いんですね。でも、必ずしもそのまま順調にいく子というのは一握りじゃないですか。やっぱりスポーツは体が資本ですから、けがをしてしまったらそこで終わってしまうかもしれない。でも、こういった取組をしていると、そのスポー

ツだけじゃなくて、その子のキャリアというんですかね、そういうところのセカンドキャリアを見つけるためにもつながる活動だと思うので、本当に尊敬いたします。ありがとうございます。

井上（秀）さん：ありがとうございます。

市長：ありがとうございました。
　それでは、ちょっとこれから全体の議論の中で、また触れさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

（拍手）

＜意見交換＞
市長：それでは、残されている時間もそんなに多くないんですけども、せっかく皆さんからすばらしいお話があったので、ちょっとまだ御発言いただいていない方から、参加者の皆さんからお話しいただきたいんですが、まず、浜野さんは、これまで地域活動とかというふうなのはされておられますか。

浜野さん：私は今までそういった地域活動、ボランティアとか全く参加したことがなくて、ここにいる皆さんの中で多分一番そういうのに縁遠いというか、皆さんが意識高い系だとすると、私は意識低い系なのかなというぐらいな感じで、皆さんすごいなというふうに思っていて、そういう感じです。

市長：どうですかね。興味あるところってありました。

浜野さん：そうですね。なかなか今、自分もちょうど１歳４カ月の子どもがいまして、子育てを妻と奮闘中なんですけども、やっぱり今いけるかなと思うのは、２番目ですか、食育のこども食堂ですか。あれはちょっと行ってみたいなというふうに思っていまして、何かそういうところから地域との関わりとかができるのかなというところで、実際、そのボランティアというわけじゃないですけど、利用する側で、例えばこども食堂とか、まちかどマルシェとかも、できれば行ってみたいなというふうに思いました。

市長：ありがとうございます。
　今回、この公募に応募していただいたきっかけって、どういう感じだったんでしょうか。

浜野さん：そうですね。やはり自分も共働きで、子どもを朝近所の保育園に預けた後、都内のほうに働きに出て、妻も働いてという中で、仕事と家事に追われる中で、なかなか地域の行事とか、どういうのがあるのか分からなかったりとか、目を向ける機会というのがなくて、土日も仕事で疲れちゃうんで、なかなかこういう地域のほうに行ったりとかというのができなくて、せいぜい隣の区に自分の実家があるんで、そのじいじ、ばあばのところの実家に子どもを連れて行って、ちょっと一緒に遊ばせて、それぐらいの子育ての感じしかなかったので、もうちょっと自分の中でそういった地域の取組みとかが分かれば、子どももそういうところに連れていけるし、また、子どもも飽きずに、宮前区をまた好きになってもらえるのかなということもあって、ちょっと自分の勉強のために参加させていただいたという形です。

市長：本当にありがとうございます、参加していただいて。
　浜野さんのような方にどんどん参加していただきたいなと思っていて、誰も浜野さんがおっしゃった、み

んながみんな意識高い系の人たち、ここにいらっしゃる人たちも最初から意識高い系の方ばかりじゃなかったと思うんですね。何かをきっかけに、誰かと知り合ったことによって何かできてきたということがあるので、何かそういうきっかけというふうなものをどんどんつくり出していくことって大事だなと。

先ほどから実は、皆さんからコメントが出ている、知るという情報発信の話がありましたね。

井上さん、情報によりますと動画作成の仕事をしているという話を聞きましたけども、まさに情報発信なんていうのは、動画からいうとお得意なほうなんじゃないかと思うんですが。

井上（大）さん：そうですね。動画、広告の業界で働いていて、僕もこういう活動に興味を持ったのと、地元が福岡なんですけど、この鷺沼に住み始めて１０年ぐらいたっていて、何かすごい住みやすいまちだなと思っていたんですけど、ふと考えたら全然まちのことを知らなくて、知ってみていろんな活動をしていただいて、今日のこういう会合もそうなんですけども、こんなにいろんなまちの中で活動的にやっている人たちがいるんだというのを知れて、いろんな人の話を聞いて、僕もそうだったんですけど、やっぱり情報を得る機会とか、得る先がきっかけがないかとか、それが一つにまとまってじゃないですけど、何かみんなここを見に来れば、いろんなものを知れる場所があるとなると、もっと化学反応じゃないですけど、いろんなことが起こるんじゃないかなという気がすごく感じました。

市長：そうですね。

井上さん、こちらの活動団体４団体発表していただきましたけど、どれか知っておられましたか。

井上（大輔）さん：マルシェは鷺沼駅前で何かをやっているなみたいなのは、野菜を売っていたりとかしてやっているんだというのはあったんですけど、本当にそのまま通過してしまって、中まで見ることがなかったので、先ほどの発表をお聞きして、何かいろんなワークショップをやられていたりとか、いろんなものを売っていたりとかといった話を聞いて、すごくいいと。

市長：ありがとうございます。

浜野さんに続き、井上さんも参加していただいて、本当にこういう方々に参加していただいて、本当に嬉しい限りですね。

実は、先ほど小川さんからの市長に要望という話がありましたけども、どういうものをどう、例えば市政だよりにこういうイベントをやるから載せてという依頼というのはものすごくあって、あの中では紙面では全く入り切らないので、ほとんどが入り切らないということなんですね。

ですから、どうやって伝えていくかというのはずっと課題になっていて、紙面じゃなかなかもう難しいよねと。紙面を見る方も大分、紙面を見ない方もいらっしゃるということなので、実はこの中で御存じの方、余り知らなかったらショックなんですけど、かわさきイベントアプリって、ああという声が上がっていますけど、それは聞いたことあるけど見たことないという感じですか。

小西山さん：入れています。

市長：入れていますか。

小西山さん：入れていましたけど、余り使い勝手が悪くて。

市長：そういうお声も大事です。

小西山さん：うちの子も大きいので、そういうイベントというか、乳幼児対象のイベントの情報なので要らないかなと思ったんですけど、同じように乳幼児の対象の方も使い勝手が悪いというか。

市長：それって子育てアプリのほうですか。

小西山さん：何か偏っているのかな。宮前、かわさき子育てアプリでしたけど。

市長：子育てアプリとは違うんです。イベントアプリというのがございまして、そこでもやっているんですが、使い勝手の問題は多分、課題としては残っているだろうと思います。

どこの情報を知りたいですかということで、主催している団体もイベントを登録できて、見る側も、例えば自分は宮前区の情報だけを欲しいですというのを登録して、優先的に情報が入ってくるというような、そういうイベントアプリというのをかわさきアプリという中の一つとして開発しました。

まだまだ、知っている方は知っている、知らない人は全然知らないということなので、もっともっと広報しなくちゃいけないんですが、かつ使い勝手というものをもっとよくしていかなくちゃいけないなと思っているんですが、これは鶏と卵みたいな話で、もっと使い勝手をよくして、アクセスしてもらうようになれば、登録していただける方というのももっと増えてきてということになるので、そういうものをさらにうまく活用していきたいなと思いますし、していただきたいなと思っています。是非、この広報もやっていきたいと思います。

それと、チラシを貼っていいか、いけないかというのは実はすごく線引きというのが難しくて、もう御案内のとおりだと思いますけども、非営利という形でやっていても、どこにその差があるのというのがすごく線引きが難しくて、これは一定のルールがないと難しいなと思うので、ここは僕なんかも、これ、そんなもうけを出していかんなんていう話じゃないんだから、いいじゃないと思っているんだけど、その線引きが非常に難しいというところがありますから、その趣旨などをどう捉えてやれるかというのは、私ももう一回検討したいなと思います。

先ほどの冒頭の古泉さんの話からあったように、市民活動に参加するというのが、余裕がない。一番回答の中で、参加したいなと思っているのが３１％、意欲はあるんだけど、実際は１１％でしたっけ。大体２０％ぐらい開きがあるというふうなところで、一番の理由が時間的余裕がないと。あるいは、２番目がきっかけがないということでしたけども、でも、余裕がないといっても、じゃあ月に１回だったらどうだろうか、月に２回だったらどうだろうかという入り方だったら、少しは入れるんじゃないかなと。

先ほどのこども食堂でも、月に２回ですけど、そのうちの１回でも、ほんの短時間でもということでも可能なわけですよね。ですから、そういう場が、確かに犬蔵から有馬のほうには難しいけども、犬蔵にそういうものがあれば、ちょっとはできるかもねというふうな、小学校区ぐらいに何かイベントだとか、そういうものがあればアクセスはしやすくなってくるのかなと。

ですから、マルシェみたいな形で、活動している人たちが、あ、じゃあ自分のところでもやってみようというふうに広がっていけば、その分アクセスする人というのは増えてくると思いますけども、どうでしょうか。

伊原さん、何かコメントいただけますか。

ちょっと無理やり過ぎましたかね。手挙げのほうにしましょうか。

伊原さん：うんうんと聞いていましたけど、すみません、そう思います。

月１とかそういう割合ではないんですが。

市長：話、ちょっとずれますか。

伊原さん：ちょっとずらしてもいいですか。

市長：ちょっとずらさないでいただきたいですね。
　そしたらば、町会活動をしていただいている小口さん。やっぱりこういうことが、それぞれの地域で、細かなエリアでどんどん活動が増えていくと、いろんな多世代の人たちの居場所が、こども食堂でもいいし、子どもだけじゃない、例えばコミュニティーカフェというのができていくと、みんながちょっと立ち寄れるところがあって、月に１回、月に２回とか、そういう形でもいいから出てきてくれるということが、これからも地域社会にとってものすごく大事だというふうに思われると思うんですけども、町会活動をされていて、どういうふうに思われますか。

小口さん：確かに今、具体的にじゃあ何をしたらいいかということを、私、ちょっと思いつかないんですけど、やはり皆様のさっき御意見をお聞きして、やっぱり町内のいろんなところに入っていきたいんだけど、ちょっとなかなか入っていけないという方はたくさん皆様いらっしゃると思うんですね。
　私も最初そうでした。私、９年前にこっちに来たんですけど、仕事を辞めちゃって、やっぱりここがいいと思ったんで、やっぱり先ほどの方、ふるさとということをおっしゃっていましたけど、私もそう思ったんですけど、入っていくのにちょっと壁がありました。
　それで、じゃあ、どうしたらいいかなと思いまして、じゃあ、私にできることで貢献したらいいんじゃないかなということで、それで、じゃあ広報紙をつくるのをお手伝いしましょうと言ったら、そしたら、それは素直に入れまして、そしたらだんだん、だんだん深みにはまったと言ったら語弊がありますけど、今、なかなか皆さん町内会に入るという人がだんだん少ないみたいな傾向がございますね。だから、これもやって、あれもやってということになりましたけど、確かに皆さんにどうやって壁を低くして入れることが大きいテーマだと思います。

市長：そうですね。ですから、やっぱり今問題となっているのが自治会町内会の加入率が低くなってきていると。だけど、やっていただいている自治会が担っている仕事ってものすごく多くて、自治会町内会が崩壊すると途端に地域社会が危うくなるというのは、これ現実なんですよね。
　例えば、上村さんなんかも、私、一緒におやじの会というのに入っていたんですけども、おやじの会で子どもたちのつながりで入っていたところから、ＰＴＡをやり、あるいは町内の町会の役員をやりというふうな人材を創出しているという形で、やっぱりいろんな活動をしている人たちが地域の中に入っていくということというのが、先ほどのファンズアスリートの皆さんのように、こういう連携の仕方から地域のお祭りに手伝いに行ったりとかという、これ、どこの自治会町内会でも、もう人手不足で若者の力を借りたいと思っても全然アクセスがないといったところに、こういうアスリートの若い人たちが入ってきてくださるというのは、いきなり活性化しますよね、会長。そんな感じしますよね。

小川さん：実際、そうだと思います。
　ただ、やっぱり、ここはたまたまそういうことで今協力してくれていますが、実際今、花の台の会の方もお話がありましたけど、本当に今自治会、ちょっと興味が皆さん薄れてきているのかなと。先ほども市長のお話がありましたけど、今、入ってくれる人もいるかもしれないけど、今度は逆に抜けていく人も、多いということで、自治会から出ていっちゃう人も今いる中で、なかなか会員数が増えないということで、今、す

ごく、これからどうしていけばいいのかなというところです。
　だから、こうやった今ファンズなんかでね、よくお世話になっています。

市長：そうですね。ありがとうございます。
　じもたんｋｉｄｓの皆さんが、いろんな地域資源を発掘していただいている中で、こういう方たちと地域が、なるべく小さな地域の中でつながり合っていくというのが、私のところではないんだけど、彼らのところだったら持っているよ、あるよと。ああいう人いるよ、こういう人いるよというのがつなげられているというのが辻さんのマルシェの取組だったり、こういうすばらしい人材の方たちが集まってくる、展開してくるというふうないい形になるように、そういうものをこれから宮前区の中でどんどんつくり出していくという、その仕掛けが大事かなというふうに思っていて、そういう取組を今後宮前区で区長中心にやっていくということなんですが、私は本当に１個進行を間違えている部分がありまして、区役所から一つ発表があったんですよね。あれこそ、またいい取組ですよね。何分必要ですか。

司会：本当は一つ宮前区から発表を用意していたのですけれども、今日は本当に皆さんに御意見をいろいろ伺うということがすごく大事な時間かなと思うので、また、ぜひ宮前区から別の機会を捉えて、皆様に御紹介できればなというふうに思っていますので、ごめんなさい。ちょっと盛り込み過ぎました。

市長：すみません。本当にごめんなさい。
　ちょっと一言だけ、どんな話だったか、さわりだけ聞かせてもらっていいですか。さわりだけ。

企画課米塚担当係長：すみません。宮前区役所の企画課、米塚と申します。
　販売会が１１月２４日から高山団地の集会所のほうで、住民さんと東急さんと区役所のほうで一緒に考えながら、住民主体の販売会というのをやる予定です。
　高台にある団地なんですけれども、これは９月に２回試行実施ということでやったところなんですけども、東急ストアさんが物を持ってきてくれて、それを住民さんが販売するという、そういう会なんですけれども、団地の狭い集会所のところにいろんなものを持ってきて、これは果物を持ってきてというところで並べまして、こんな感じでいろいろ並べまして、住民の方がやるということなので、住民の方、知っている方が知っている方に売るというのもあるので、いろんな方が出てきてくれるというところがありまして、ちょうどこれ、やったときも、なかなか買い物に行けなかったというおばあちゃんが、足が痛かったんだけど近いから来てみたというところで、久しぶりに近所の方に会ったということで、抱き合って喜んだという風景も見られたりということで、自分たちだとできないんですけれども、企業さん、東急ストアさんの協力を得て、プロの方が持ってきてくれるというところで、自分たちでできないんですけれども、プロが入ったということで一緒にできるということで、身近にこういう販売会ができるんじゃないかということで、３者でいろいろ考えながら今後やっていきたいと思っているところです。

市長：大分端折っているけど、分かりましたかね。
　実はその高山団地というところが高台にあって、高山団地にお住まいになっている方もかなり高齢化が進んでいるんですね。その山を下りて買い物に行って、また持ち上げてくるのというのはすごく大変ということで、やや買い物難民状態になっているというのが地域課題なんです。それをどうやって解決するかというので、区役所と地元の自治体町内会などを含めて、そして、東急ストアさんがすごく御協力をいただいて、荷物を全部運んできてもらうと。昔、スーパーがあったところなんですけど、スーパーがなくなっちゃったので、そこに上げてくれて販売会をやるという取組が始まったということなんです。

そこには、実はさっきのファンズアスリートの皆さんじゃないですけども、若者の、どうやって探してきたんですか、学生さんたちは。

企画課米塚担当係長：地域の方のお手伝いしてくださるという住民の方が、自分の学校の生徒とかも一緒にできたらいいんじゃないかという提案をいただいたりとか、地域を巻き込みたいというお話を今いただいているところです。

市長：そういう若い学生さんたち、中学生とかも入ってもらって、買った荷物を市営住宅の４階まで上げるの大変だから手伝ってくれるとかということにつながれば、もっといい交流が進むんじゃないかということを、今、計画して、実施に入っていくということですよね。

企画課米塚担当係長：実際、ファンズの井上さんのほうも、現地を９月のときに見てくださって、面白いから、是非うちもどうでしょうかというお話を今いただいているというところです。

市長：そうなんですか。ありがとうございます。

井上（秀）さん：しかも、ＨＥＡＴ－ＵＰが乗ろうとしていますので。

市長：そうなんですか。プロレスラーも参戦ですか。すごいですね。
　というように、その地域の課題が、買い物難民状態のところをどうやって解決するかというのを、いろんな人たちとの組み合わせによって問題を解決しようということなので、こういうような取組みというのは、区内のいろんな課題にみんなで取り組もうというものを挑戦していきたいなということでございました。
　すみません。私の仕切りが悪かったのでこうなっちゃったのですが、もう時間が実はオーバーしてしまって、まだ言いたいことが一つありそうですね。
　じゃあ、３０秒でいいですか。

田中さん：犬蔵から来ました田中夏実と申します。
　私は３人の子どもがおりまして、３番目の男の子が１８トリソミーという障害を持って生まれました。その子の介護を自宅でしたんですけれども、それを通して地域の方にすごくお世話になりまして、それでちょっと恩返ししたいと思ってここに来たんですが、その一つが、生活クラブ生協という生協の中のエッコロ共済というのにたまたま入っていたんです。自宅で介護するに当たって、子どもにつきっきりになりますので、家のことが何もできないんですね。そういったときに、サポーターさんと呼ばれる方を派遣してもらって、家事をちょっと手伝ってくれる。ちょっと買い物してくれる、洗濯してくれる、そういうのがものすごく力になって、そうじゃなかったら我が家は回らなかったんです。
　私は、そういうサポートを受けられましたけど、私と同じような立場にある方でそういうサポートもない、私は往診の先生も来てくれましたし、訪問看護師さんもいらしてくれたんですけど、往診の先生も決まらないという、在宅医療を抱えている方はたくさんいると思うんです。
　そういうちょっと助けてほしいという人と、あと、ちょっと手が空いたから、子育て落ちついたから助けてあげたいという人をつなぐ、そういうエッコロ共済みたいな、そういうのを支援していただきたい。もっと拡大していただきたい。私は入っていたからできたけど、入っていない人もたくさんいます。そういうのが言いたかったのと、それで、人が出入りするじゃないですか、それによって地域の方ともすごく知り合いが増えましたし、上の子たちとサポーターさんが、まるで血はつながっていないんですけれども、第二、第

三、第四のおばあちゃん、おじいちゃんみたいな存在になったりして、すごく活性化すると思うんですね。そういう在宅医療じゃなくても、普通に子育てで大変なお母さんとか、介護で大変な方とか、そういう人たちにそういうサポートがあったら、子育てでも行き詰まって虐待だったりとか、そういうのも減るんじゃないかなと思うんです。

あと、３０秒をすごい超えていますけど。

市長：ちょっとここまでのところで１回切らせてもらっていいですか。また、御発言、また別の形でいいですかね。

それで、今、田中さんがおっしゃったことはすごく大事な話で、まさに今、川崎市がこの１０年で一番大事な政策だと言っている地域包括ケアシステムの取組そのものなんですね。それに、どういう地域包括ケアシステムに見合うコミュニティをどうやって作っていくかということについて、今、ずっとやっておりまして、そこで、いわゆる中間支援組織じゃないですけど、いろんな人たちがやれることというのをつないでいく、そういう仕組みづくりというのをこれからまさにやっていこうとしています。そういう形じゃなければ、これからの難局は全く乗り越えられないだろうというふうな思いでいます。

ですから、実はこういうテーマを設定している宮前区が、今日のこの取組みもそうなんですが、どういうコミュニティを作っていくか、まさにそこを目指してやっていることなんです。ですから、是非、みんなの力をどうやってちょっとずつ共有していくかということになってくると思いますので、そんな市づくり、区づくりということをやっていきたいと思っています。

すみません。ちょっとオーバーしてしまいましたので、皆さん、本当に言いたいことがもっともっとたくさんあると思うんですが、ここで一度終了させていただきたいと思っています。

物足りないことがたくさんあると思いますが、ぜひ、御理解をいただければと思っています。

私にも言っていただいても結構ですし、今日は区長の発言が１個もなかったんですが、それもちょっと容赦してもらって、この会を終了したいというふうに思っています。

御協力いただきまして、本当にありがとうございました。

（拍手）

司会：ありがとうございました。まだまだ話は尽きないところではございますが、お時間となってしまいました。

市長からもありましたように、現在、市ではこれからのコミュニティを支える新たな仕組みづくりを進めております。

区としても、今日一例として駆け足で御紹介させていただきましたけれども、そのような市民と事業者と行政が一緒に協力し合って知恵を出し合い、地域の課題が解決するような、そんなふうなことを進めていきたいと思っております。

それでは、以上をもちまして、第４０回区民車座集会を終了いたします。皆様、ありがとうございました。

市長：どうもありがとうございました。